

研究資料

7人制ラグビーの攻撃戦術の15人制ラグビーへの応用

武石 健 哉

Kenya Takeishi: Application to 15 system rugby of the attack tactics of the seven-a-side. Faculty of Sport Science, Bulletin of Sendai University, 42 (1) : 31-39, September, 2010.

Abstract: The purpose of this study draw the knowledge about the attack side of 15 system rugby and the seven-a-side from precedent study and documents. It is to inspect the example that Sendai University wrestled with. As a result of what I examined, a contact technology of the contact area, fitness are refined by seven-a-side. These were required in 15 system and were shown to be applicable. In addition, that I could use the tactics of the seven-a-side for the tactics of 15 system rugby was thought about by an example of Sendai University which I trained.

Key words: attack, break down, fitness, decision making
キーワード: 攻撃, ブレイクダウン, フィットネス, 状況判断

I. はじめに

現在国内のラグビーの競技人口は減少傾向である。金井¹⁾は「高等学校における部員数, チームの減少は続いている」と指摘する。近年, 大学ラグビー界ではプレーヤーの争奪戦である。環境や条件の良いビッグクラブには人は集まる。少人数のクラブのコーチや選手は限られた人材で, 技能や競技力向上を目指し日々研摩を重ねていると考えられる。しかし多くのプレーヤーを抱えるビッグクラブと少人数クラブとの対戦では, ビッグクラブが勝利することが多い。

15人制での効果的な練習形態について, 柴田ら⁶⁾は様々な制約のもと, よりゲームに近い15人対15人の形で攻防を行う練習の有効性を示唆している。また勝田²⁾は世界的トップコーチであるフランスラグビー協会のピエール・ビルブルー氏の練習形態について「ウォーミングアップも含めて練習の最初から最後まで, すべて正式なゲームの人数によって, 攻防形式

で進められる」とし, 15対15の攻防形式が効果的であることを示唆している。

中川¹¹⁾はラグビーのようなボールゲームにおけるスキルに関して, 「各ボールゲーム特有の動作を単に(ゲーム状況から離れて)遂行する能力がスキルではなくて, 現実のゲーム状況下との対応関係の下で遂行する能力がスキルであると理解されなければならない, ゲーム状況との関連性を持たない単なる動作遂行能力をテクニックと称し・・・」と述べている。

ラグビーというボールゲームでは, 試合でスキルを発揮することが大事であり, 練習においては, このスキルを獲得することがもっとも重要なのである⁶⁾。

柴田ら⁶⁾や勝田²⁾の述べた練習形態は, 常時30人にて, 攻防形式の練習ができるクラブにとっては有効であるが, 少人数のクラブでは実施困難である。その為7対7, 14人にて実施可能となる7人制の攻防形式を練習に取り入

れ、ラグビーのゲームに必要なスキルを獲得することが少人数のクラブには効果的ではないかと考えられた。

表1は溝畑¹⁵⁾が整理した15人制と7人制の比較に筆者が加筆したものである。グラウンドの大きさ、ルールに変わりはないが、プレーヤー数から1人に与えられるスペースが7人制は大きい。表2は1プレーヤーが1試合にボールを持った回数であり、その多さが7人制の特徴としている。

椿原ら¹⁰⁾は近年の7人制では攻撃においてコンタクトを重視した戦術をとり、15人制に近づいてきたことを示している。

これらの先行研究から、7人制の攻防形式の練習やゲームにより獲得されるスキルとして、ブレイクダウン、ボールキャリアー時の決断能力(以下ではディシジョン・メイキングと表記する)が考えられた。

佐々木⁵⁾は15人制で勝つチームの必須条件として攻撃時でのブレイクダウンスキルが上げられるとしている。

森¹⁶⁾は今後増える15人制のトライの形として、ターンオーバーやキックキャッチからのカウンターを上げている。

先行研究からは、7人制と15人制の攻撃面の戦術がつながるのではと考えられたが、7人制から15人制へ攻撃面の戦術を活かす研究に関する文献は見当たらない。我が国のラグビー界の現状からすると、少人数のクラブであっても7人制の攻防形式の練習・ゲームを行い、その戦術や獲得したスキルが15人制へ応用することが可能であることを明らかにすることは、日本ラグビー界の発展に意義がある。

本研究では7人制ラグビーと15人制ラグビーの攻撃面に着目し、文献調査により得られた知見を引き出すとともに、その結果を踏まえ

表1 15人制と7人制の比較

	15人制ラグビー	7人制ラグビー
人数	・15人	・7人
役割	・専門的なスキルが必要	・7人がほぼ同じスキル
試合時間	・40分ハーフ	・7分ハーフ
グラウンド	・同じ ゴール間の距離100m, タッチライン間70mとすると、1人のプレーヤーのしめる面積の平均は約200m ² である。	・同じ 1人に与えるスペースが広い。約429m ² である。
ルール	・ほぼ同じ ただし、トライ後のキックオフはトライされたチームが行う。	・ほぼ同じ ただし、トライ後のキックオフはトライを奪った側が行う。

出典：溝畑(1998)を参照し、筆者加筆

表2 1プレーヤーが1試合にボールを持った回数

1993 HONG KONG SEVEN A SIDE						
	SEMI FINAL		SEMI FINAL		FINAL	
	FIJI	AUSTRALIA	SAMOA	NEW ZEALAND	SAMOA	FIJI
TOTAL	58	43	45	53	47	53
AVERAGE	8.29	6.14	6.43	7.57	6.71	7.57
MINIMUM	4	4	3	3	3	3
MAX	11	9	11	12	11	12

出典：溝畑(1998)を参照し、筆者作成

て仙台大学の戦術に当てはめた事例を検証することである。

II. 調査方法

本研究では、調査資料として各大学紀要、体育学会抄録、体育学研究抄録を中心に文献調査を行った。

III. 結果

1. ラグビーの攻撃

1) 15人制の攻撃

15人制ラグビーの攻撃を述べた後、7人制の攻撃について述べる。

日本ラグビーフットボール協会が発行した

コーチングの指針¹²⁾では攻撃の目的とは得点を上げること(トライ)であるとしている。攻撃の原則と一般的な流れについて述べる。図1は2方向における攻撃原則である。ゴールラインに向けて直接的に攻撃を仕掛ける縦への攻撃と、側面へ攻撃を仕掛ける横への攻撃がある。これらの攻撃によってディフェンスを縦もしくは横方向のうちの1つにうまく固定し、その逆の方向を攻撃することが攻撃の原則となる⁷⁾。図2はラグビーの攻撃の一般的な流れである。局面において複数あるプレーの選択肢から、適切なプレーを積み重ねていくことが必要となる。

森¹⁶⁾は15人制の得点パターンの分析・検討を目的に、全国高等学校ラグビーフットボール大会のゲームを対象にし、近代ラグビーにおい

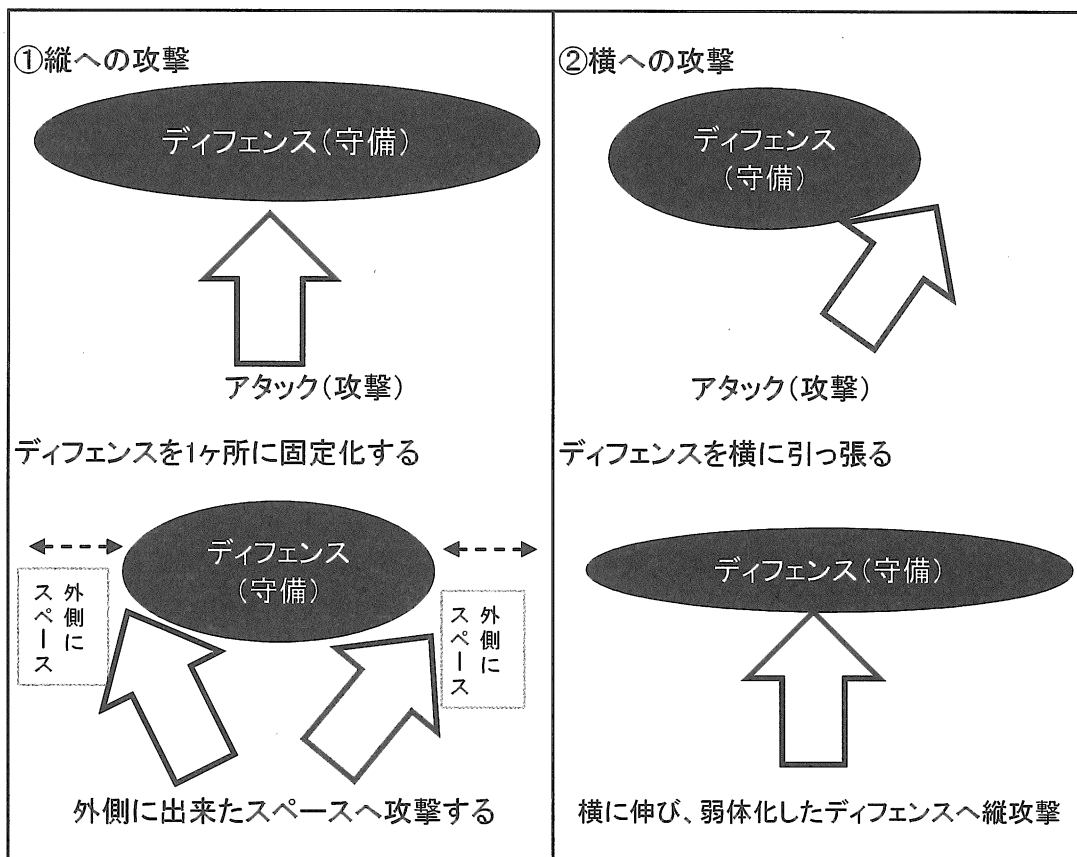


図1 2方向における攻撃原則

出典：石井（2003）を参照し，筆者加筆

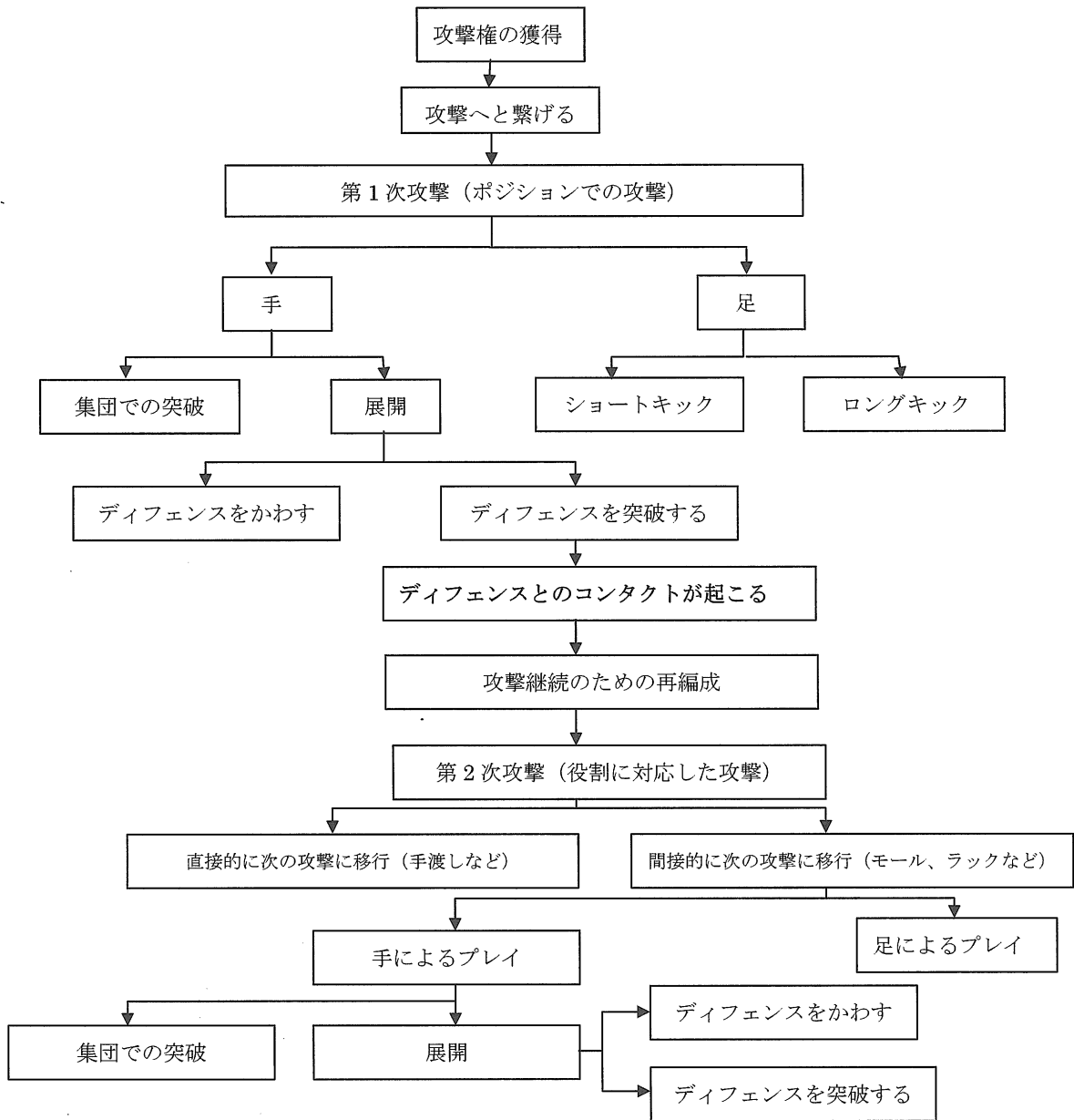


図2 ラグビーの一般的な攻撃の流れ

出典：石井 (2003)

て、1995年以降のオープン化に伴い、個々のディフェンステクニックや組織ディフェンスの急速な進歩、変化により、セットプレーから簡単にトライが獲れない試合が増えてきたこと、今後ターンオーバーや相手キックからのトライといったボールキャリアー時のディシジョン・メイキングが要求されるトライが増えるものと推察されたことを明らかにした。

佐々木⁵⁾はゲーム・スキル分析をパフォーマンス評価、世界的傾向と、各国の強化普及方針構築を目的に、ラグビーワールドカップ2007の予選プールのゲームを対象にし、上位チームは得点高度標準陣地(敵陣22m)における進入時間を相対的に長く維持できる組織力、セットプレーでの優位性、ブレイクダウンスキルの開発が必須であることを明らかにした。

黒岩ら⁴⁾は2008 - 2009シーズンにおいて、大きな競技規則の改正が試験的に実施され、そのことがゲーム様相にどのような影響を及ぼすかを検証することを目的に、関東大学リーグ戦のゲームを対象にし、失トライの起点は、タックルターンオーバー、PK、FK、キックチャージなど自チームのミスからが多いとし、15人制のゲームにおいて攻撃を継続するスキルの重要性を明らかにした。

広瀬¹³⁾は、攻撃継続能力をトレーニングにより向上させることを目的に、関東大学対抗戦所属ラグビー部を対象にし、コンタクトプレーの質を高めることが攻撃継続能力に繋がることを明らかにした。

これらのことから15人制の攻撃において、攻撃を継続する際のブレイクダウンスキル、防御側が弱体化しているスペースを正確に判断し攻撃できるディシジョン・メイキングが攻撃の目的を達成する為に必要なこととして検討された。筆者が着目した7人制にて獲得可能と推察したスキルは、15人制の攻撃においてもトライを獲得するために必要なスキルであることが明らかになった。

2) 7人制の攻撃

ここでは、7人制の攻撃について着目する。

溝畑¹⁵⁾は7人制の魅力が15人制と比較することで明らかにすることを目的とし、1992、1994、1996年開催の香港セブン(7人制)、1995、1996年開催のジャパンセブン(7人制)、15人制は1996年の南半球3カ国対抗ラグビー3試合、1996年にニュージーランド代表が南アフリカで行ったテストマッチ3試合を対象とし、7人制は得点機会が多いこと、1プレイヤーのボールを持つ回数が多いこと、個人水準の状況判断能力が重視されることを明らかにした。

渡辺ら¹⁷⁾は日本における7人制ラグビーが世界の7人制ラグビーに拮抗するための一指針を得る為の基礎資料を提供することを目的に、1999年開催の「JAPAN SEVENS 99」の試合のうち、国内チーム同士が対戦した国内トーナメント9試合、外国チームが対戦する国際トーナメント10試合を対象に、競技レベルが上がるにつれてターンオーバーが少なくなり、トラ

イ頻度が少なくなることを明らかにした。

椿原ら¹⁰⁾は近年の7人制ラグビーにおけるゲーム様相の傾向とその内容の変化を知り、7人制ラグビーの強化活動へ実践的に寄与することを目的に、1999年開催の「ジャパンセブンズ99」の外国チーム同士が対戦する国際予選プール12試合、国際トーナメント9試合と2001年ワールドセブンズシリーズならびに第3回ワールドカップ大会5試合を対象とし、モール・ラック数が増加したことを述べ、7人制がコンタクトを少なく、パスを多用するというスタイルだったのが、コンタクトを増やし、継続しリサイクルしながらトライを奪う15人制のゲーム様相に近い7人制のスタイルへ変化してきたこと、7人制ラグビーにおいてトライを獲得する為にはキックを蹴らず、モール・ラックでポイントを作りながら継続し攻撃することが、重要な戦術の1つであることを明らかにした。また近年の7人制の特徴として1試合あたりのインプレー数やPK数が増加し、PKの80%をタップキックからの速攻でゲームを再開していることにより、高強度のプレーならびに高水準のフィットネスが要求されるとしている。

現在の7人制で攻撃の目的を達成する為には、攻撃を継続する際のブレイクダウンスキル、高水準なフィットネス能力が必要であることが検討された。筆者は7人制で獲得できるスキルとしてディシジョン・メイキングを上げていたが、実際のゲームにおいて想像以上に高いフィットネス能力が必要とされており、近年の7人制のゲームは筆者の予想を上回る、よりハードなものとなっていることが明らかとなった。

IV. 考察

1. 7人制が15人制にとって有用である可能性

7人制がコンタクトを少なく、パスを多くするというスタイルから、コンタクトを増やし、継続するというスタイルへ変化してきたことが結果から得られた。つまり、7人制の攻撃の戦

術として、コンタクトを重視した戦術と、コンタクトを減らしパス回数を多くする戦術の2つが考えられる。

7人制は1人がボールを持つ回数が15人制と比較し多いという特徴を持つ¹⁵⁾。コンタクトを増やす戦術にて7人制の攻防形式の練習を行うことにより、プレーヤーはボールキャリアーやサポートプレーヤーとして数多くのコンタクト局面に遭遇する。その際、様々なディフェンスとのコンタクトエリアでのボール争奪戦において、ボールを継続する為のブレイクダウンスキルが養われる。コンタクトエリアでの争奪戦に必要なコンタクトスキルが実践形式で磨かれることとなる。15人制のゲーム様相に近づいてきた7人制で開発されたブレイクダウンスキルは、15人制にも十分応用可能であることが推測される。

また、これまで一般に7人制の攻撃戦術として浸透していた、コンタクトを少なく、パスを多用する戦術³⁾にて7人制の攻防形式の練習を行うことにより、プレーヤーはボールキャリアーとしてディフェンスと1対1の状況に数多く遭遇する。図2のように、ボールキャリアーは複数の選択肢から、攻撃種類を選択していく。ディフェンスの状況を判断し、適切なプレーを選択し、積み重ねていくことが必要とされる。このことにより個人のディシジョン・メイキングが向上し、15人制へも応用可能であることが推測される。

武石⁹⁾は攻撃継続能力向上に関する研究にて、今後の課題として15人制ラグビーにおける強固なディフェンスラインへのアタックプレーの開発の必要性を上げている。ボールキャリアーが継続方法の選択肢を増やし、防御側に予測させないことでコンタクト局面を優位にし、ボールを継続する。1対1の状況にて、ボールキャリアーがディフェンスより優位であれば、ボールリサイクルに必要なサポートプレーヤーも少人数となり、常に数的に優位な状況で攻撃が継続される。加藤³⁾はタックルされた時にボールを返す方法として、バックパス、プッシュパス、ワンハンドパス、グラウンドオーバーパス等を上げている。コンタクトを少なく、

パス回数を増やす戦術にて7人制に取り組み、個々がディシジョン・メイキングを養うことは、日本のラグビープレーヤーに求められていることであるし¹⁴⁾、攻撃には必要なことである⁸⁾。

2. 仙台大学ラグビー部への実践例

筆者は東北地区大学連盟に所属する仙台大学ラグビー部監督として2007年から2009年の3シーズンを過ごした。競技人口減少の影響を受けながらも、2007年20人、2008年19人、2009年18人の部員数にてトレーニングに励んだ。4年生が卒業するとその人数は約半数となった。東北地区大学連盟に所属している大学と関東地区に所属している大学のレベルの差や、関東地区強豪大学の将来有望な高校生へのスカウティング活動が活性化している現状を目のあたりにし、東北地区大学連盟に所属する大学に限られた部員数の中、競技力を向上していくには何をすべきなのかを模索する必要に駆られていた。これまでは、関東大学対抗戦、リーグ戦所属チームといった国内大学トップチームのゲーム分析を行い、戦術を真似、同じようなチームスタイルにすることで対抗することを考えていた。しかし、関東地区の強豪大学を取り巻く環境と、東北地区に所属する大学との環境の違いから、独自のチームスタイルを構築する必要性を強く感じた。そこで仙台大学は2008年コンタクトを重視する戦術にて7人制へ、2009年コンタクトを減らし、パスを増やす戦術にて7人制へ取り組むことにより、チームの競技力向上に着手した。

表3は攻撃を継続する際の決め事である。対峙するディフェンスの状況から適切なプレーを選択、意思決定はボールキャリアーが行う。サポートプレーヤーはボールキャリアーのプレーに反応し、攻撃を継続する。

図3はコンタクトを減らし、パス回数を増やす戦術による防御の崩し方である。無用なコンタクトは避け、パスによってディフェンスを動かす。ゴーフォワードより、キープザボールを優先する。

図4はコンタクトを重視した戦術による防御の崩し方である。積極的に、コンタクトを仕掛

7人制ラグビーの攻撃戦術の15人制ラグビーへの応用

表3 攻撃におけるボールキャリアーの選択肢

意思決定	パス・継続プレー
①ディフェンスとのコンタクト前に繋ぐ ※ディフェンスを引きつけパスをする	ストレートパス, ポップパス サークルパス, ターンパス
②ディフェンスとのコンタクト後に繋ぐ ※コンタクトをしてドライブ&ボディコントロールをしてパス	ガットパス, オフロードパス ヒットパス
③ディフェンスとのコンタクト後, ジョイントして繋ぐ	ドライブしながらのミニモール
④タックルされた後のワンプレーで繋ぐ ※タックルされた時に, ボディコントロール&ボールコントロールを行う	チェスト, アップ, ロール
⑤スリップダウンしてラックにて継続する ※少人数での球出し, 時間をかけない	ボディラック, ジャックナイフ

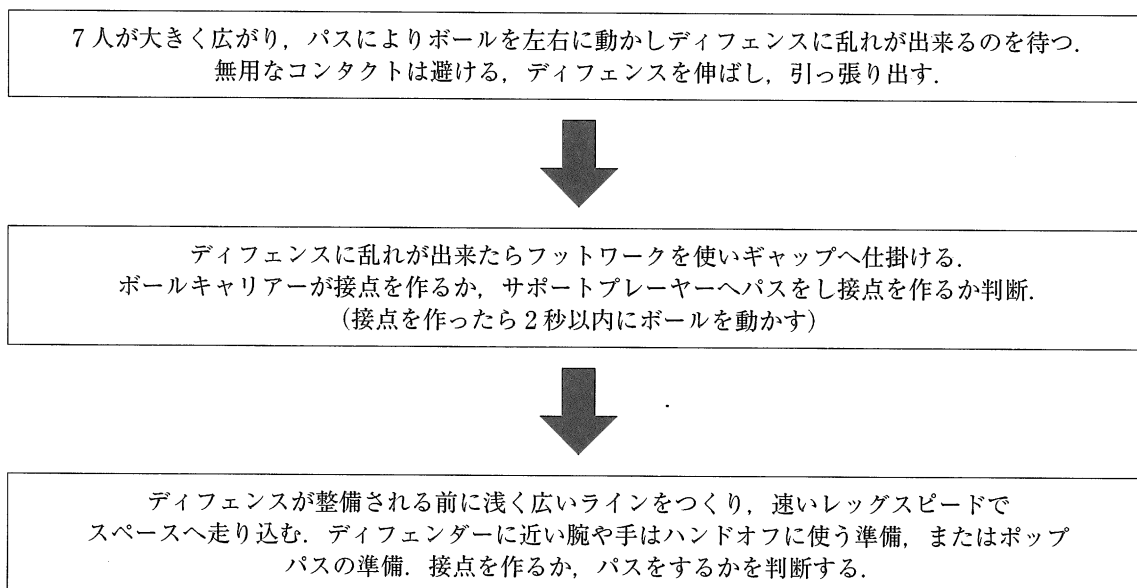


図3 コンタクトを減らし, パス回数を増やす戦術での防御の崩し方

けコンタクトエリアで優位な状況を作る。ボールキャリアーの選択肢は最小限にし, シンプルに力強く攻撃する。

以上の考え方をベースに7人制にて攻防形式の練習, ゲームに取り組んだ。その成果か2009年に9年ぶりに全国地区対抗大会に出場を果たし, 2010年と2年連続で出場を果たした。

武石⁹⁾の実践研究からも15人制でのコンタクトスキルの向上に, コンタクト重視の戦術にて7人制に取り組んだ効果が伺える。7人制は1プレーヤーがスキルを獲得するには効果的で

ある。実際に7人制に取り組むことにより, 少人数であっても攻防形式の練習が可能となり, 人数不足という課題を克服出来たと確信している。次の課題としてはチームユニット水準の能力向上への取り組みである。獲得した攻撃権のもと, 攻撃が開始されるのはスクラム, ラインアウトといったセットプレーからである。7人制で培った個人水準の能力を発揮する為にも, セットプレーでの確実なボール獲得が必要となる。練習にはスクラムであればFWのプレーヤーが8対8, 16人必要となる。今後セットプ

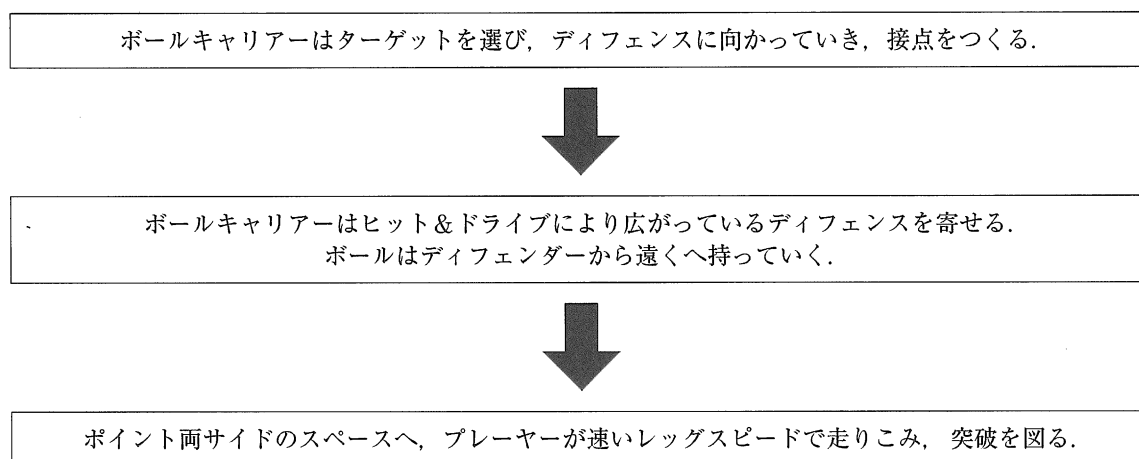


図4 コンタクトを重視した戦術での防御の崩し方

レーの強化を考える必要があり、その為には、やはり人数が必要となる。

今回は先行研究や文献からの研究といった、15人制と7人制の攻撃に関する整理に留まった。7人制ラグビーがオリンピック競技への採用が決定された今、新たな戦術や戦略、開発されるスキルがあることが予想される。今後は国際的な文献にもあたり、新しい知見を加え、7人制の攻撃に関する具体的な練習方法や、その効果を検証していくことにより、本研究もより意味深いものになると思われる。

V. まとめ

1. 文献調査からのまとめ

15人制ラグビーの攻撃法として、整っている防御の縦か横へ仕掛け、発生したコンタクトエリアでのブレイクダウンを優位に攻撃を継続し、出来たスペースへ攻撃をすることで得点に繋げる戦術と、ターンオーバーや相手のキックチェイスといった防御側にスペースがあることが予想される状況にて、ボールキャリアーがディシジョン・メイキングし攻撃を仕掛け、得点に繋げる戦術が考えられた。7人制ラグビーは、コンタクトを減らしパス回数を多くする戦術から、コンタクトを多くする戦術へ変化している。コンタクトを重視した戦術にて7人制の攻防形式を行うことにより獲得されたブレイク

ダウンスキルは、15人制においても攻撃を成功させる為のスキルとして応用が可能であると考えられた。

2. 仙台大学の事例からのまとめ

仙台大学では、コンタクトを重視する戦術とコンタクトを減らし、パス回数を増やす2つの戦術にて7人制に取り組んだ。その結果、人数が少ないことによる練習の質の低下を防ぎ、15人制での試合の成果に繋がった。しかし、スクラムやラインアウトといった、ユニット水準の練習への取り組み方法が今後の課題として考えられた。

文献

- 1) 金井律男(2010), RUGBYFOOTBALL, Vol59 - 5, NO.342, (財) 日本ラグビーフットボール協会: 東京, pp14
- 2) 勝田隆(2002), 知的コーチングのすすめ, 大修館: 東京, pp98 - 99
- 3) 加藤尋久(1999), How To Sevens Rugby, RUGBYFOOTBALL, Vol,48 - 6, (財) 日本ラグビーフットボール協会: 東京, pp48 - 46
- 4) 黒岩純・荒川崇・伊藤寿彦ほか(2009) 2008シーズンにおける流通経済大学ラグビー部の公式戦ゲーム様相, 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 1 (2), 103 - 115頁
- 5) 佐々木康(2008), ラグビーワールドカップにお

- ける予選プール順位構造, 日本体育学会予稿集, 59巻, 200頁
- 6) 柴田尚都・川口鉄二 (2005), ラグビーのコーチングにおける Game-on-Approach 採用の有効性に関する実践的検討, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, Vol.6, 91 - 96頁
 - 7) ジャン・ビダール, (監) 日比野弘 (2003), 図解フランスラグビーレッスン, (株) ベースボールマガジン社: 東京, pp18 - 19
 - 8) 前掲書 7), pp218 - 219
 - 9) 武石健哉 (2010), ラグビーにおけるコンタクトスキルのトレーニングに関する実践研究, 仙台大学紀要, 41巻 (2) 161 - 171頁
 - 10) 椿原徹也・渡辺一郎 (2002), 7人制ラグビーにおけるトライに関する研究, 日本体育学会大会号, 53巻, 540頁
 - 11) 中川昭 (1985), ボールゲームにおける状況判断研究のための現状と将来の展望, 体育学学研究, 30巻, 第2号, 109頁
 - 12) 日本ラグビーフットボール協会(2006)JRFU コーチングの指針, (財) 日本ラグビーフットボール協会: 東京, pp4
 - 13) 広瀬恒平 (2006) ラグビーにおけるコンタクトプレーのトレーニングにおける実践研究, 筑波大学体育科学系紀要, 29巻, 35 - 44頁
 - 14) 溝畑寛治 (2006), 日本におけるコーチングの問題点, 身体運動文化フォーラム, 創刊号, 157 - 169頁
 - 15) 溝畑寛治 (1998), 7人制ラグビーの魅力, 関西大学文学論集, 48巻 (1) 39 - 47頁
 - 16) 森 弘暢 (2007), 第86回全国高等学校高校ラグビーフットボール大会のゲームにおける得点パターンに関する研究, 奈良工業高等専門学校研究紀要, 43巻, 71 - 76頁
 - 17) 渡辺一郎・齋藤武利・勝田隆・河野一郎 (2000), 7人制ラグビーにおけるゲーム様相に関する研究, 日本体育学会大会号, 51巻, 424頁

(平成22年5月28日受付)
(平成22年8月24日受理)